

第 347 回研究報告会 (2022 年 4 月 28 日)

「自由と平和—ウクライナ侵攻：宗教界の声明を見る」

堀内みどり

ロシアによるウクライナへの武力行使に対して日本の宗教界による「声明」「談話」について紹介した。教団・宗派のホームページでの掲載が確認できたものを中心に、ウェブニュースで報道されたニュースの情報の一部を提供した。最も早い声明は、2月25日付の日蓮宗宗務院総長名のもので、その後仏教会から相次いで声明文や談話がホームページ上で発表された。武力行使への遺憾の意や戦争・紛争の悲嘆さを表明し、1日も早い平和回復を願う趣旨が短文の中に表現されている。キリスト教系ではカソリックもプロテスタントも「3月2日の灰の水曜日」に合わせた祈りと断食を呼びかけていた。

報告会の後半では、国際学部の日野貴夫氏から、現況について質疑応答の形でお話を伺った。天理大学はロシアともウクライナとも交流があり、それぞれ約50名、約90名の留学生を受け入れてきたこと、天理大学からも留学に行っていることなどを中心に、現況をお聞きした。

連載執筆のねらいと執筆者紹介

「文脈で読む『身上さとし』」

本連載では、「おさしづ」の「身上さとし」に込められた神意をその文脈に沿って探究していく。そのねらいは二つある。

第一に、おたすけとはどのようなものか、ということの探究である。古今東西、身体の不調は当人および周囲の人々の生活

を揺さぶり、根本的な反省を迫る。実際、お道の教えを聞くようになるきっかけの多くは身上の障りであり、あるいは、たとえ信仰するようになっても改めて真剣に教えを求めるときは、何らかの身上や事情で自身の生活の行き詰まりを感じる時であろう。本連載では、そうした状況において「おさしづ」ではどのような言葉が伝えられているのかを見ていきたい。つまり、「おさしづ」をおたすけの現場の言葉として読み解くということが第一の主眼である。

第二に、「身上さとし」を個人の病状に対する「原因—解決」の枠組みで見るとはならず、そのお言葉の文脈や教史の流れも踏まえながら見ていく。つまり、そこに込められた神意を単に個人的な感得の次元だけではなく、その家族や周囲の人たち、さらには世界中の人々に対する論しとして探究していくことが第二の主眼である。多くの場合、個人の身上は、周りにとっては事情でもある。その意味で、本稿では便宜上主に「身上さとし」の言葉を使うが、意味合いとしては「事情さとし」も含まれている。

また、本連載の前提には深谷忠政著『身上さとし—おさしづを中心として—』(天理教道友社、1962年)がある。連載タイトルには、『身上さとし』に示された洞察を各「おさしづ」の文脈から捉え直すという意味も込めている。

深谷耕治 (ふかや こうじ)

天理大学人間学部宗教学科講師。1983年奈良県生まれ。京都大学大学院修士課程(社会学)を修了後、パークレー神学連合大学院修士課程(宗教学)に留学し修了。その後天理大学附属おやさと研究所の嘱託研究員、同大学の非常勤講師を経て現職。専門は天理教学、宗教研究。

2022 年度公開教学講座のご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ (8) —

2022年度の公開教学講座は、次の日程で、昨年度と同様にオンラインでの配信を予定しております。ただし、状況に応じて、対面での開催も検討いたします。

- 第1回 5月 永尾教昭所長 オンライン配信中
151話「をびや許し」
- 第2回 6月 澤井真研究員
111話「朝、起こされるのと」
- 第3回 9月 岡田正彦研究員
139話「フラフを立てて」
- 第4回 10月 八木三郎研究員
108話「登る道は幾筋も」
- 第5回 11月 森洋明研究員
119話「遠方から子供が」
- 第6回 1月 堀内みどり主任
126話「講社のめどに」

グローバル天理

第23巻 第6号 (通巻270号)

2022年(令和4年)6月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 永尾教昭

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan